

## 和歌山県日高川の津波史料について\*

中 村 重 久\*\*

### On historical documents of tsunamis around Hidaka River in Wakayama-ken

Shigehisa NAKAMURA\*

**Abstract:** Historical documents of tsunamis around Hidaka River in Wakayama-ken were reviewed with recently found documents on 1854 Tsunami. Comments are made upon the urban design and the flood control for future possible tsunamis of 1854 Tsunami's magnitude.

#### 1. 緒 言

わが国では古くからの津波の史料が集成されている(たとえば、田山, 1904<sup>1)</sup>; 都司, 1981<sup>2)</sup>; 宇佐美, 1983<sup>3)</sup>; 渡辺, 1983<sup>4)</sup>)。このような史料の集成は津波年表(たとえば IIDA et al., 1967<sup>5)</sup>; SOLOVIEV and GAO, 1974<sup>6)</sup>)の基礎資料として重要であり、また、津波の実態を知り、その予測や対策に関連して必要なものである(中村, 1984<sup>7)</sup>)。ところで、このような史料の残されていないところやそれが世にあらわれていないところは、年表や史料集などからみて、大きな津波の来襲はなかったかのごとく考えられ、津波の被害がなかったものとされる傾向が強い。

いみじくも御坊市(和歌山県)北塩屋のまんじゅう屋の山本清七記すところの“つなみ心得咄し”が発見され、その解説が塩崎登彦氏によってなされた。この史料は、現在の御坊市を中心として日高川周辺の1854年の津波の実態を知ることのできる貴重なものである。ちなみに、これまでにみることのできる資料で、日高川周辺について、これほど詳細な記述をしたものはない。

ここでは、はじめに、既往資料で日高川周辺の津波についての記述をとりあげ、つぎに、“つなみ心得咄し”の本文の紹介をし、さらに、現時点における津波の問題との関連について考察する。

#### 2. これまでの資料

日高郡誌(森彦太郎編, 1923<sup>8)</sup>)をみても、日高川周辺の津波についての記述はごくわずかである。直接関連のある部分のみをとっても以下の通りである。

1707年(宝永4年10月4日)の地震・津波については、“日高川口付近にありては名屋浦の民家多く流失せしが源行寺は本堂庫裏等の破損に止まる。罹災民に対しては[名屋浦鑑]御救として粥等被下之云々”とある。

1854年(嘉永7年11月4・5日)の地震・津波については、“日高川地方にありては、浪頭、新町に寄せ家中に魚躍の奇観を呈し、北塩屋沿海の民戸全く漂没し、名屋浦の民は多く源行寺本堂に避難す。日高川を溯る小舟は木葉の疾風に散るが如く、岩内社前大野に輻輳して、或は傾き、或は破る[野口村誌]吉原にては、洪浪、田井の切戸を越ゆるに至り、避難せんとして、舟を西川に浮べたるが為め、却って沈没溺死せし者あり”と。また、[名屋浦鑑]には、“昨四日朝辰下刻大地震、潮高きこと津浪のごとし。五軒家にて三尺位、塩屋辺にて五尺、伝へ聞く印南辺にては八尺位と云々。今日申下刻又大地震、西南海大に震動すること数万之雷一時に落る如し。暫くして大津浪来り地震は尚止まず海中鳴ること炮の如し、地震頻りに震、大なるもの世の常ならず次第に相減じて両三年にして止む炮の如く鳴るもの俗名海鉄炮といふ。予は最初源行寺に走る。出本堂板椽見え、初度浪及本堂御拝雨落、再度浪不入門内、三度之浪及本堂御拝踏三段庫裏者庭而已云々”。

これが、和歌山県災害史(1963)<sup>9)</sup>では、“御坊町付近流失家屋百三十戸、御坊町は全部浸水、松原村では旧

\* 1984年6月18日受理

\*\* 京都大学防災研究所附属白浜海象観測所  
〒649-22 和歌山県西牟婁郡白浜町堅田畑崎  
Shirahama Oceanographic Observatory, DPRI,  
Kyoto University, Katada-Hatasaki, Shirahama,  
Wakayama, 649-22 Japan.

井の切戸を突破して津波侵入，御坊藪では源行寺本堂御拝の雨落まで（海岸から八百米），南塩屋では法華堂まで，塩屋では南の王子神社石段の九段目まで，それぞれ津波が達した”。とされている。

ついでながら，続日高郡誌（1975）<sup>10)</sup>では，“昭和19年12月7日（1944）東南海大地震 日高郡への影響は少なかった”。また，昭和21年12月21日（1946）南海道大地震 について，〈塩屋村役場〉は“午前4時20分の初震後，約10分で地鳴りと共に潮鳴りが轟々ときこえ，5分後には津波が押しよせてきた。電灯は消え一面の暗夜で，辛うじて避難した。海辺に近い部落は全く物品を搬出する暇もなく，ただ子供や老人を避難させる余裕がなかった。幸いに津波の速さは子供の走る程度で，村民の生命に被害はなかった”と記しているにすぎない。

### 3. つなみ心得咄し

“頃は嘉永七年寅霜月五日大地震大津浪にて誠に恐ろしき事，

四日朝五ツ半時大地震，四ツ時より八ツ半時迄高汐にて津波上り候とてや村中皆々心配致し，諸道具，着類皆々山へ持出し，諸人用心致し候処其夜何事もこれなく，それ故五日朝より諸道具，着類，家を片付け残らず相納め候処，当日七ツ時大地震誠に諸人心心配致し候処，未申の間にて山もくずる様にどんと鳴り，此と鳴り止り候節津波上り，此浪引くと又候式度目の浪上り，此浪引くと又三度目の浪上り，此浪壹番大浪に御座候誠に恐ろしき事筆紙に記しがたく候。

一，五日八ツ半時頃より清七和田祭礼当てに御坊へ仕込に参り候処，大地震ゆり出し，それより直ぐ様罷り帰り名屋浦辺天田渡し場へ参り候節に，川口より津浪上り，渡し舟向いへ付く手前にて津浪に出合い，のり合三人，船頭 天田伊三郎 右四人 矢のつく如くに野口迄相流れ，船頭伊三郎終に水死仕り，残り三人相助かり候。渡し場に有合わせ候小船六七はいれ残らず岩内野口迄相流れ候。

其有様を清七見るより直に名屋浦へ逃げ込み，持合わせ候 荷物 相捨て，風呂敷の内より 札式 入れ置き候紙入銭四百文取り出し懐中致し，御坊辺へ心差し候処，名屋浦にて右紙入れ落とし，ひろわんと致し候節西の方より浪上り，こわたまらじと其のまま捨て置き，それより名屋浦御宮を心差し 田地を横切れに東へはしり，直ぐ様宮へ上り 戌亥の方に下がり松有之，直ぐ様右松へ取り登り候節に足元壹尺程ぬらし，右松のこずえへ登り，念仏を申し，只生きる心地は少しもなくあじ居り候節

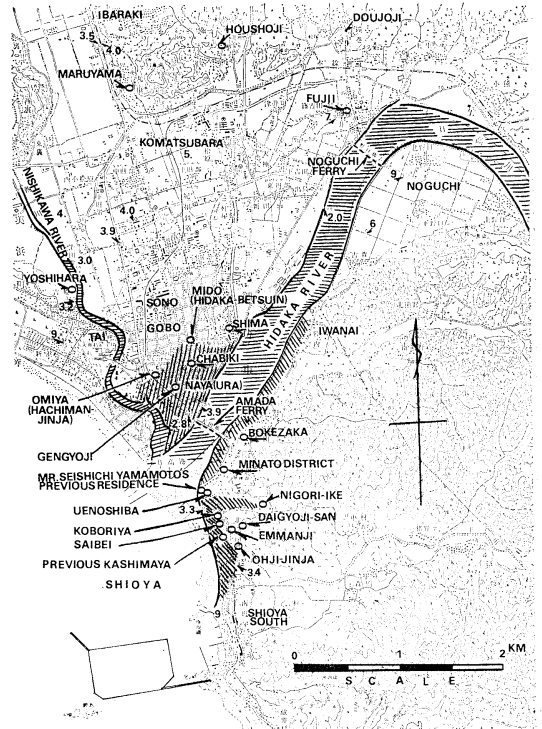


Fig. 1. Affected area of 1854 Tsunami around Hidaka River, Wakayama ( $33^{\circ}53'N$ ,  $135^{\circ}10'E$ ). Hatching: no effect. Numeral: present elevation in meters. (after the National Geographical Institute)

に，浪は六尺程にて茶換辺まで上りそれより引き浪に相成り候。其時，松の枝にて助かり候人は，我等と名屋浦佐野屋殿と，ふじ田甚吉の息子 浅吉殿と右三人に御座候。

それより浪引き候節，日も西へ入り夕方に相成り候節，ふしぎなる哉此神前に石燈籠に燈明の光り相見え誠に不思議なる事に候それより松枝を下り，三人連れにて源行寺の方へ心差し候得共，道もわかりかね田地畑けを横切りに源行寺南迄参り候源行寺の本堂に名屋浦の人々堂中に集まり念仏のみ申し候。

此処にて右兩人に別れ我等下野へ心差し候処，おせい殿は何れかに逃げ明家にて御座候。それより紺桶殿へ参り候得共当家にておせい殿に出合い右の有様咄し致し候節に又候南の方にて浪の音致し，直ぐ様おせい殿と同道にて御坊西町へ逃げ込み，それより御堂へ逃げ込み候時，浪は御堂裏門前迄見え，それより本堂へ上り見れば数百人の人々念仏をとえ居り候内にも地震度々ゆり夜四ツ時頃月の入又候地震ゆり，此地震本堂ゆりつぶれ

候程の大地震に御座候。

其時我等思ひ候には、とても命はなき物と先ず小松原へ心さし母親兄キにも合い度く思ひ先ずおせい殿にわかかれ、それより小松原に参り候内も度々地震ゆり候。

御坊、新町、嶋村辺の人皆々道成寺会下法性寺（鳳生寺の誤か）又は丸山へ登り、我等は小松原にて兄キ家内皆々畑ケ中へむしろ敷念仏をとえ居り候。

其夜明七ツ時頃より我等家内をあんじ小松原家内とわかかれ、それより藤井村渡し場迄参り候節に明け方に相成り候 右渡しを渡り野口村高森・岩内へ参り、右岩内天田の間、畑ケ田地へ波打込み船流れ込み、それより木爪坂を打越湊迄参り候 此辺津浪にて散乱に相成り候。家木道具数々流れ道も分り兼ね候事に御座候。此辺にて村内三人に出合い、先ず家内無事の様子承り安心致し候。

先ず家内老人は何れに相逃げ候哉と尋ね候得共皆々上の芝に居候様承り、それより上の芝へ登り、文次郎殿畑ケ中に皆打集り、我等顔見合い、物もいわずに泣くばかり、其日八ツ時頃親仁平右衛門殿野口村田淵健庵殿よりむかい参り野口へ相預け候。前老母は荊木村森伝大夫殿方へ相預け、家内は我等とお房、糸吉、敬治郎と四人連にて文次郎殿に世話に相成り森屋新兵衛殿と仲間にて小家掛同居致し候、右小家に七八日程住居致し、それよりふじ田万平殿へ引き移り右万平殿藤井村にて奉公致し候て右家明家に御座候。それゆえ文太夫殿と同居致し右家にて三十日程住居仕り候。それより大手お梅茶屋の古家買取り、かり立普請致し先ず店出し致し、極月十三日引移り、親仁、老母引取り目出度正月致し候。

併し乍ら右小屋掛にて商売難出来 それゆえ安政武卯五月当家普請仕り候 右普請甚だ六ツヶ敷それゆえ親類懇切の方にも御意申し銀子調達致し候。

- 一 銀貳百目 野口村 田淵健庵殿
- 一 銀百目 下野口村佐竹九郎兵衛殿
- 一 銀五拾目 荊木村 酒屋長三郎殿
- 一 銀五拾目 御坊中町 ふじや藤助殿
- 一 銀五拾目 新町 和屋喜太夫殿
- 一 銀百目 明神川 徳市殿
- 一 銀貳百五十目 印南原中津由右衛門殿
- メ 八百目也

右銀子にて普請致し盆前に引移候

誠に右津波恐ろしき事御座候

年々此事家内へ読みきかせ誠に〃〃

恐るべし〃〃〃〃〃〃

- 一 親類懇切の方より津浪見舞品々  
右に記るす歡ぶべし

紀小竹 三原 孫三郎殿

- 一 壺ツ身布子 壺枚
- 一 刻煙草 壺包
- 新町 和泉屋喜太夫殿
- 一 嶋四布ふとん 壺枚
- 一 嶋小ふとん 壺枚
- 一 味 噌
- 一 錢貳拾目
- 是は当喜太夫殿極内々にて下さる
- 新町 和泉屋庄右衛門殿
- 一 白 米 壺斗
- 一 嶋ふとん 壺枚
- 一 嶋木綿切
- 一 浅黄かすり袖無羽織壺枚
- 但し、糸吉へ
- 一 (のし印)風呂敷 壺枚 但し武巾
- 御坊 藪屋忠右衛門殿
- 一 嶋布子 壺枚
- 但しお房へ
- 一 嶋木綿切 壺丈四尺
- 但し右同断
- 一 古足袋 壺足
- 御坊 岩屋屋久兵衛殿
- 一 嶋壺ツ身 壺枚
- 但し敬治郎へ
- 一 腰 巻 壺枚
- 但し右同断
- 一 く き 沢山
- 一 風呂敷 壺ツ
- 但し武巾くき包候共
- 御坊 紀小竹屋五右衛門殿
- 一 古 畳 五枚
- 一 青梅嶋綿入半天 壺枚
- 一 じゅばん 壺枚
- 一 古 帯 壺筋
- 此武品五兵衛殿内々
- 御坊 米屋儀兵衛殿
- 一 小 豆 五升
- 御坊 ふじ屋 藤助殿
- 一 飯 くき添 壺重
- 一 古平□ 壺ツ
- 一 下 駄 貳足
- 一 錢 貳拾目
- 新町 和泉屋幸三郎殿

- 是は庄右衛門殿息子
- 一 銭貳拾目  
但し極内々  
御坊 紀小竹屋藤兵衛殿
- 一 下 駄 壱足  
但し皮はなを添
- 一 杓 子 貳本  
御坊 紀小竹屋利喜蔵殿
- 一 味 噌 壱鉢  
但しどんぶり共  
御坊 紀小竹屋佐兵衛殿  
店手代中
- 一 飯 台 壱ツ
- 一 茶 わ ん 三ツ
- 一 箸 箱 壱ツ  
御坊 仮家半之丞殿
- 一 半 古 平 壱ツ
- 一 そうめん箱 壱つ
- 一 小 箱 壱ツ  
御坊 吉田屋長兵衛殿
- 一 くわんす 壱ツ (鐘子のことか)  
御坊 森本屋善兵衛殿
- 一 三ツ組どんぶり鉢 壱組  
御坊 米屋源兵衛殿
- 一 金 貳 朱
- 一 いらじゃこ 壱籠  
御坊 天田屋文右衛門殿
- 一 味 噌 壱重  
当浦羽山氏
- 一 餅 壱重  
小松原 中屋吉右衛門殿
- 一 茶のみ茶わん 拾人前  
御坊 天性寺
- 一 小豆飯 壱重
- 一 味 噌 壱重
- 一 餅 少し  
下野 足袋屋太助殿
- 一 白 木 綿 壱反
- 一 足 袋 貳足  
但し清七へ
- 一 古 帯 壱筋  
吉原惣通り 平蔵殿
- 一 茶漬茶わん 拾人前  
御坊 米屋吉兵衛殿
- 一 くき 沢山  
大阪 近江屋久兵衛殿
- 一 茶呑茶わん 拾人前  
南塩屋 松屋由兵衛殿
- 一 そば切 拾五膳 但し、だし付  
荊木村 森角大夫殿
- 一 白 木 綿 五尺五寸
- 一 味噌漬茄子 壱重  
但し 味噌共  
嶋村 橋本屋弥兵衛殿
- 一 小 豆 飯 大壱重
- 一 に し め 壱重  
荊木村 酒屋長三郎殿
- 一 嶋綿入羽織 壱枚
- 一 酒のかす 沢山  
立石村 お津太殿
- 一 白 米 三升  
当浦 ふじや佐兵衛殿
- 一 炭 壱俵  
当家にて日数三十日程借家仕候  
印南原 中津由右衛門殿
- 一 飯 大壱重
- 一 に し め 壱重  
是は本家と貳家共
- 一 小 竹 四束
- 一 嶋 布 子 壱枚 但しお房へ
- 一 前 だ れ 壱枚
- 一 嶋 女 袷 壱枚 但しお房へ
- 一 嶋 切 八尺
- 一 銭貳百文 小松原 玉置禎庵殿
- 一 嶋四布ふとん 壱枚
- 一 あ ん ど 壱ツ
- 一 銭貳拾目 荊木村 森伝大夫殿
- 一 母人霜月八日より極月廿一日迄世話に相成候帰宅  
の節左の通り
- 一 四布ふとん 壱枚
- 一 貳巾ふとん 壱枚
- 一 座ぶとん 壱枚
- 一 前 だ れ 壱枚
- 一 足 袋 壱足
- 一 嶋 単 物 壱枚 但し老母へ
- 一 嶋袖無羽織 壱枚 但し桑吉へ
- 一 味噌漬茄子 壱重 但し味噌共  
新町 角屋嘉右衛門殿 御内義

- 一 嶋小立裕 壹枚 但し糸吉
  - 一 嶋単物 壹枚 但し敬治郎へ  
 霧沢時治郎殿
  - 一 紅無地 八尺 足袋屋伊兵衛殿
  - 一 帯 式筋
  - 一 小足袋 式足  
 下野
  - 一 嶋三布ふとん 壹枚
  - 一 小箱類 色々
- 津浪後お房、糸吉敬治郎、清七誠に世話に相成時に食つぶし候

天田村 由良仲右衛門殿

- 一 白味噌 壹重 三尾 光明寺
- 一 嶋木綿 壹枚
- 一 嶋小切 色々
- 一 古綿 少し 田辺 秋津 油屋殿
- 一 へちま 壹斤 当浦 権六殿
- 一 へちま 壹斤 当浦 天田屋喜兵衛殿
- 一 米 五升 小松原 中屋七兵衛殿
- 一 米 式斗 三尾 光明寺
- 一 嶋小立裕 壹枚 但し糸吉へ
- 一 裕半天 壹枚 但し糸吉へ
- 一 古足袋 壹足 但し糸吉へ
- 一 小ばっち 壹足 但し糸吉へ
- 一 茶男帯 壹筋 但し清七へ
- 一 銭 五百文
- 一 白米 壹斗 小松原 玉置養徳殿
- 一 餅 壹重
- 一 風呂敷 壹ツ
- 一 銭銀等 大小式ツ
- 一 つい立 小壹ツ
- 一 小びようぶ 壹ツ 茶免 かじや大助殿
- 一 庖丁 壹丁 小松原 中屋利兵衛殿
- 一 白米 五升 但し人物共
- 一 足袋 壹足 但し老母へ
- 一 嶋布子羽織 壹枚 但し老母へ
- 一 嶋前たれ 壹枚 但し老母へ
- 一 木綿嶋切
- 一 ふとんがわ
- 一 小米 沢山 但し重箱共
- 一 よむぎ 沢山
- 一 梅干 壹重
- 一 麴 大壹枚
- 一 四布風呂敷

- 霜月分
- 一 米 壹斗八升 壹人前三升づつ六人前
- 極月分
- 壹斗式升 壹人前三升づつ四人前
- 但し壹人前六升づつ式度被下
- 是は御上様より被下候事
- 一 米 壹斗 御坊村  
 藤井村  
 江川村

右の通り誠に難有仕合に御座候歎ぶべし  
 附り

- 一 津浪にて流候家数数百拾軒  
 流死人数 拾壹人 南は才一郎殿  
 鹿嶋屋より南へ流れ残る東は才兵衛殿  
 小堀屋円満寺辺小西治郎衛門殿辺東え残る又宮下  
 清助殿より橋詰迄流れ西は道より西は残る 奥は  
 森岡うばへ橋迄家木流よる、中奥は太行寺山、に  
 ごり池下迄家木流れよる。

#### 4. 考 察

前節の津波史料については、その記述の信頼性や正確さをはかる目安をも考慮して、津波そのものに関連しない部分もすべて示した。これまでの史料などから、1854年の津波によって被害の及んだ範囲は、日高川流域については Fig. 1 のようになる。“この(1946)地震で紀伊半島の南部潮岬付近の海岸は、平均海面に比較して隆起し、富田村以北の海岸は逆に平均水面に比較して沈下した。紀伊半島中部海岸の地盤沈下は南海道大地震後も続き、海南市・大崎村・由良町・比井崎村・白浜町・新庄村など海浜低地は屢々大潮に襲われ被害を受けるようになった”(続日高郡誌, 1975<sup>10)</sup>)とされており、これに対応する記述は、KANAMORI (1973)<sup>11)</sup>にもみとめられる。河川計画や都市計画による改修工事対象外の日高川周辺の地盤高が、現在と当時(1854年)とほぼ同じと考えると、最高水位は T.P.+4m 程度と推定される。ちなみに、日高川は洪水が多く、元和6年(1620)以来、被害の記録が残されており、最近の例では、昭和28年7月17-18日(1953)には天田橋・野口橋を流失した。このようなことから、日高川下流部の河川堤防の天端は天田橋地点で T.P.+6.9m (1984年現在)となっている。1854津波クラスの来襲で注意すべきは、北塩屋の国道42号線路面(T.P.+2.9m)および日高川口右岸側の一部(T.P.+3.6-2.3m)である。もちろん、西川下流の浜ノ瀬(T.P.+2.6m)もその対象である。

## 謝 辞

本研究の一部は土屋義人教授の示唆にもとずき、文部省自然災害補助金（自然災害特別研究）によった。津波の史料は、御坊市文化協会長の塩崎登予彦氏より提供いただき、また、日高川河川計画関連資料の利用は和歌山県御坊土木事務所の御好意によった。

## 参 考 文 献

- 1) 田山 実 (1904): 大日本地震史料. 震災予防調査会報告. No. 46, 甲, 乙, 1-606, 1-590.
- 2) 都司嘉宣編 (1981): 紀伊半島地震津波史料——三重県・和歌山県・奈良県の地震津波資料. 防災科学技術研究資料, No. 60, 科学技術庁国立防災科学技術センター, 1-392.
- 3) 宇佐美竜夫 (1983): 資料日本被害地震総覧. 東京大学出版会 (第5刷), 1-335.
- 4) 渡辺偉夫 (1983): 改訂日本およびその周辺の津波の表. 地震, Ser. 2, 36, 83-107.
- 5) IIDA, K., D. COX and G. PARARAS-CARAYANIS (1967): Preliminary catalog of tsunamis in the Pacific. Hawaii Institute of Geophysics, University of Hawaii, HIG-67-10, Data Report No. 5.
- 6) SOLOVIEV, S.L. and Ch. N. GAO (1974): Catalog of tsunamis in western coast of the Pacific Ocean. Academy of Science, USSR, Izdat. Nauka, 1-130 (in Russian).
- 7) 中村重久 (1984): 津波の古記録とその意義について. *La mer*, 22, 1977.
- 8) 和歌山県日高郡役所 (森彦太郎編) (1923): 日高郡誌. 1694 pp. (同 (1970): 日高郡誌(上), 812 pp., 名著出版)
- 9) 和歌山県 (1963): 和歌山県災害史. 574 pp.
- 10) 続日高郡誌編集委員会 (1975): 続日高郡誌(上). 1782 pp.
- 11) KANAMORI, H. (1973): Mode of strain release associated with major earthquakes in Japan. *Annual review of earth and planetary sciences*, 1, 213-239.